「老船長の幻覚」（有島武郎）論

― 悲劇性の原拠 ―

吉田俊彦

はじめに

《五年前、芥川龍之介氏の死が報ぜられた時の激しい衝撃を、今日も尚われわれは忘れない。その衝撃の激しさは、決して芥川氏の死がわれわれにとって予想外であった為ではなかった。むしろ芥川氏の自殺は、いかなる自然死よりも自然なものとわれわれには思はれた。芥川氏の死がいかにも自然なものと思はれるといふこの事実に、われわれは愕然としたのだ。死がいかに堪へ難くわれわれの身辺に逼ってゐるかといふことを、明瞭に知ったのはこの時である。最早、問題は有島武郎氏の死の場合の様に「人ごと」ではなかった。》（井上良雄）[注(1)]

夫ある美貌の婦人記者、波多野秋子と軽井沢の別荘で心中した有島の情死を「人ごと」として受けとめる井上良雄にとって、有島の生と死は、人間や社会や時代の奥所を凝視する知識人の負うべき生の苦悩とか死の宿運とは無縁のものであったのである。

有島の死が余りにもゴシップ的な情死であったために、世人が「私のあなた方に告げ得るよろこびは死が外界の圧迫によって寸毫もうながされてゐないといふ事です。私達は最も自由に歓喜して死を迎へるのです」（弟妹への遺書）という遺書を識めて自殺した有島の生の苦悩や思想的背景に眼を向けなかったのは当然といわなければならないが、それにしても、「或る女」という巨大な世界を構築した有島の文学的評価が芥川のそれと比較し余りにも過小視されつづけたことに対しては、奇異な感を抱かざるを得ないのである。

この小論では、まず、出発期における有島の、芥川と共通した生の危機意識に着目し、次いで、「老船長の幻覚」の形象過程に見られるホイットマンの受容とそれによる危機超脱の認識志向を抑え、最後に、苛酷な自己否定の深さを持つ有島文学の悲劇的原拠を、愛の原体験の中に尋ねてみたい。

一　有島の「二つの道」

《レルモントフは「自分には魂が二つある、一は始終働いてゐるが一つは其働くのを観察し又は批評してゐる」といった。僕も自己が二つあるやうな気がしてならない。さうして一つの自己はもう一つの自己を、絶えず冷笑し侮辱してゐるンだもの、僕は意気地のない無価値な人間なンだもの、それはボルクマンもよみ、ノラもよんだのだから、何故自己の生活に生きないといはれるかも知れない、けれども僕は到底そんなに腰がすゑられない、（略）まるで反対なものがいつも同時に反対の方向に動かうとしてゐる。》（芥川龍之介、山本喜誉司宛書簡、明治・44、傍点引用者）

この芥川の書簡に見られる自己分裂の危機状況が、何に由来するものか、明らかではないが、鋭利な理知でもって際限のない検索を重ねる芥川の困憊した神経の震えと底知れない不安感が、文面に強く表れていることは、一読して明らかである。鋭利な理知の負うこの分裂的危機状況の克服を、イプセンのボルクマンやノラの生き方に見た芥川が、習慣とか世間の拘束を離れ、主体的な生の衝迫に忠実に生きようとする志向を明確に自覚していたことは間違いあるまい。ただ、芥川にとっては、身近な「家」の秩序と権威が、自己確認や自己拡大を図る戦いの対象としては余りにも弱小なものであったため、イプセンの勇猛な戦いを「家」に向けることが出来なかったのだといえよう。

儒教的な時代秩序が、富国強兵の国家目標をもって強大化していく資本主義社会機構の中で崩壊しはじめても、芥川には、新たな時代形成者たる位置づけを、通人的家風を守る己れの家の生活美学の中で果すことはできず、また、新たな時流に背馳するだけの強大な伝統的権勢基盤も持ち合わせず、結局は、自己検証の手だてとして、広範な読書による諸文化の渉猟をつづけ、そして、後進国日本の近代化を観念的に相対化せざるを得なかったのである。

読書家、芥川の姿は、級友の眼には、「超然とし」[注2]た「秀才」に映っていたといわれているが、「頭脳を武器に」（大導寺信輔の半生六）級友と「絶えず『格闘し』（同）、その頭脳によって級友を凌駕しようと願う芥川は、「あらゆるものを本の中に学」（同）び取ろうとしていたのである。そして、いつしか、クロポトキンの「青年よ、温かき心をもって現実を見よ」（日光小品）という言を忘れ、ボードレールが徒労の歎きの底に失墜させた「イカルス」の飛翔を夢見てしまったのである。

「二つの道」の有島は、こうした芥川とはかなり事情を異にしていたといわなければならない。まず、第一は、農場経営という具体的な生活事業に対する誠実な人間的対応によって、分裂的危機状況を招いたことである。

《唯区々たる農業を事とせんとするは何ぞと問ふ人あらば、我は答へん「政治は維新に於て一頓進をなせり。商業は当に革新の時機に際して歩武着々たり。工業の隆盛なる、僅々三十年左右にして此の如きに至るは蓋し多く比類を見ざる所、独り農業に至りては古来一轍農夫旧によりて古套を墨守す。（略）我敢て大材を以て任ぜずと雖も願くは以て農業革新の魁たらん。》（明治30・5・7、日記）

この日記には、西垣勤氏の指摘のとおり、「明治的近代のインサイダーたらんとする思想」[注3]を抑えることができる。農業革新の具体的内容については明らかでないが、「我先づ奮ふ、二十四郡豈一人の義士なからんや。明らさまに云へば我は農業を為すに今一の目的あるなし。農業は神聖無垢他の事業の到底企て及ぶ可らざるものあればなり」（明治30・5・7、日記、傍点引用者）という日記内容から推して、陋劣な欺瞞性を持つ父の功利主義への反発が、革新精神の原点にあることは否定できない。有島のこの批評精神は、「親子」の「兎に角嘘をしなければ生きて行けないやうな世の中が無我無性にいやなんです。（略）嘘をするのは世の中ばかりぢゃ勿論ありません。私自身が嘘のかたまり見たいなものです。けれどもさうでありたくない気持がやたらに私を攻め立てるのです。だから自分の信じてゐる人や親しい人が私の前で平気で嘘をやってるのを見ると、思はず知らず自分のことは棚に上げて腹が立って来るのです」という思いを父親に向って吐露する主人公の純粋性に繋っているのである。

新興資産階級たる「父」の陋劣な処世の欺瞞性を掘り起しながら、現実世界の厳しさと自己の暗い宿運と哀しい骨肉の愛を「親子」の形象を通して確めなければならなかった有島が、実業家に対して、「富を得んとするものは（略）憐れむ可きかな。彼は常に人に対して疑惑の眼を張らざる可からず。常に己れの為めに思ひなやまざる可からず、常に貧しきものを使役せざる可からず。世に最も憐む可き職業ありとすれば政治家と実業家なる可し。」（明治36・6・16、日記）という批判的な意見を持つに至るのは必然の帰結であったといってよかろう。有島のこの批評精神は、「小作者とは実に憐れむ可き階級なり。彼等は服従の外の何者をも知らず。余は彼等の丁寧に余に礼するを見て殆んど逃げんとするに至りぬ。同じく是れ人、而して一は彼の如く一は此の如くなる所以は何ぞや。是れ人類最終の理想ならんや。余等と彼等と相共に住む可く世は造られたり。相隔りて住む可きにはあらざるなり。」（明治36・6・25、日記）という認識を生み、そして、この認識は、やがて、「少数者の手から幸福を多数者に分つやうにする為めには、実際方面に於て社会主義が主張されるのは無理のない事だと思ふやうになった。」（「リビングストン伝」の序）という社会主義的思想へと成長していくのである。

自家農場の管理、フレンド精神病院における看護業務、ピーボディー家での家事手伝い、そして、ニューハンプシャーの或る農家での下働きという具体的な生活体験の中で成長させていったこの社会主義的思想は、有島自身の人間的良識によって整理された理念に適合するものではあっても、資産階級たる有島家の生活基盤を否定し去るものといわねばならない。芥川にみられるような、「あらゆるものを本の中に学」（大導寺信輔の半生六）び取り、自閉的な観念の世界で反措定を重ね増幅していく自意識過剰の分裂危機とは異質のものである。有島の招く自己崩壊の危機状況は、生の普遍的理念を根源的に問い糾していく主体的な認識志向と思想化に向う鋭利な知性と理念の実現を図る誠実な実践志向と、そして、他者を慮る鋭敏な感性を兼ね備えた有島の、聡明、誠実、温雅な人間的資質のもたらす悲劇に外ならない。

次いで、第二に注目すべきものとしては、河野信子、リリイ、ファニイ、ティルダー、神尾安子達への誠実な人間的対応が招く危機状況を挙げることができる。霊と肉、聖書と性欲という二元葛藤の苦悩と自己分裂の危機は、やはり、有島の

聡明、誠実、温雅な人間的資質の負わねばならない悲劇といえるのであるが、この悲劇は、「老船長の幻覚」の形象モチーフを考えていく上において、とりわけ、重要な意味を持つものと考えられる。

芥川は、習作、「SPHINX(a farce)」において、華麗な虚栄を満すあでやかな吉田弥生への鋭い神経の構えと安寧な充足を齎す素朴な吉村千代への柔らかな心臓の傾きとに分裂する自己の確認とその統一を試みたといえるのであるが、理想的女性の象徴「SPHINX」の印象薄弱な形象性とか青年ABCの三様の生を「王」の認識視座で深く葛藤させることもせず娼婦の生によって性急に相対化していく観念的な認識経緯には、愛の原体験に根ざした芥川の生々とした思想の生命体を捉えることはできないのである。牧歌的世界の純朴無垢な魂を持つ「少女」への愛に「王」を誘う芥川が、王宮的世界の洗錬された人工美と虚栄に縛られた過剰な自意識との訣別を一つの主要なモチーフにしていたことは明らかであるが、「少女」に「王」の求愛を拒絶させ、さらに、入水自殺という悲劇的結末を「少女」に辿らせる芥川は、悲劇的宿運の枠組みの中で感傷的にしか成立しない無垢な愛を夢想していたのであり、「王」の痛恨を捉えることもなく、「娼婦の二」の意外な純粋性を「王」の視座に浮び上がらせる終末部には、主題の分裂をも露呈しているのである。

「老船長の幻覚」の有島は、「SPHINX(a farce)」における芥川と同様に、愛の原体験を踏まえながら、自己分裂の危機状況を確認するとともに、それからの救抜を企図していたといえるのであるが、この形象過程には、芥川のような、感傷的にしか成立しない夢想の愛への陶酔とか稚拙な主題分裂の破綻を見せることはない。有島は、新たな生を開示する明確な認識方向に、「幻像医師の娘」という蠱惑的な妖艶美を備えた女の個性的魅惑を生々と具象化しているのである。この形象過程には、芥川には見られない堅牢なリアリズムの眼が厳しく冴えているといえよう。ここで、「老船長の幻覚」の形象性に着目してみたい。

二　大道の歌（ホイットマン）の影響

《さ、決心なさいまし……今まで如何云ふ心持で航海をなさったの？……何時でも……何時でもあなたの脚許には、地獄の釜の蓋が開いてゐたのですよ……それを百も承知なさりながら、悪びれもせず、舵輪を握って、見事にこの船を操っていらしったではないの……海の彼方に……ね……行きませう……さ、行きませう……そこも海ですわ……船さへあれば行かれる筈よ……海図がない？……航海すればこそ海図が出来るんですわ……海図なんぞのありやうのない……船のキールが一度も波を切らない……彼方の海に行きませう……死んでも死骸が人の眼にかゝらない処まで……》

この部分は、「老船長の幻覚」の重要な山場である。父母、祖母による薫陶、キリスト教信仰、潔癖な性向などによって作り上げられた強靱な倫理的抑制意識から脱却し、心底に働く無意識の衝動の中に自己獲得の道を探ろうとする有島の新たな旅立ちを示す部分である。

ところで、幻像ABCや水夫の忠告などの抑制力と幻像医師の娘の蠱惑的な誘引力との間で葛藤を重ねさせながら、「海図なんぞのありやうのない」「船のキールが一度も波を切らない」「彼方の海」への出航を老船長に促す場面設定とその思想的背景には、ホイットマンの強い影響が見られるのである。

有島は、ホイットマンの日記の「私が何か後世まで残るやうなものを書きたいとの希望を起した最初は、一ぱいに帆を挙げて走る船を見た時だった。私は見たまゝをその通りに表現して見たい欲求を感じた」という言葉に触れながら、「恐らく学校の教師をしてゐる時分に、散歩の序でにでも海岸でその船を見たのでせう。大きな海原を一ぱいに帆を挙げて走って行く一隻の船、それはそのまゝ一つの神秘であります。象徴であります。一人の loafer なるワルトに取っては、その船の陸地から遠ざかって行く姿は、或る屈竟な暗示を彼の魂に刻んだに相違ありません」（ホキットマンに就いて）と述べているが、「船の陸地から遠ざかって行く姿」は、ホイットマンと同様に、有島の魂にも、「屈竟な暗示」を深く刻んだイメージといってよかろう。このイメージをより具体的に示すのが、「大道の歌」の次の詩句である。

≪ Allons! we must not stop here, / However sweet these laid-up stores, however convenient this dwelling we cannot remain here,

(7) *However shelter'd this port and however calm these waters we*

must not anchor here, / However welcome the hospitality that surrounds us we are permitted to receive it but a little while.

10

Allons! the inducements shall be greater, / (イ) *We will sail pathless and wild seas,* / We will go where winds blow, waves dash, and the Yankee clipper speeds by under full sail.≫

有島が、「老船長の幻覚」の山場において、幻像医師の娘に囁かせる言葉は、この「大道の歌」の詩句のイメージに強く支えられたものと考えられるのである。

「海図なんぞのありやうのない」「船のキールが一度も波を切らない」「彼方の海に行きませう」という幻像医師の娘の言葉は、「大道の歌」の下線部(イ)の「私達は水路もない荒海を航海するのだ」という詩句に対応するものであり、また、「さ、決心をなさいまし」「何時でもあなたの脚許には、地獄の釜の蓋が開いてゐたのですよ」「それを百も承知なさりながら、悪びれもせず、舵輪を握って、見事にこの船を操っていらしったではないの」という幻像医師の娘の言葉が、「大道の歌」の下線部(ア)の「此の港が何程安全でも、そこの水が何程穏かでも、私達は碇を下ろしてゐてはならない」という詩句の翻案であることは明白であろう。

このように、日常的抑制意識から脱却しようとする心底の衝迫のイメージ化にあたり、ホイットマンの詩句からの強い影響を受けた有島は、放棄すべき日常的諸拘束を、ホイットマンの詩的イメージの中で、一つ一つ具体的に確認していたといえるのではなかろうか。つまり、人物設定においても、「大道の歌」の強い影響を受けていると考えられるのである。

≪You but arrive at the city to which you were destin'd, you hardly settle yourself to satisfaction before you are call'd by an irresistible call to depart, / You shall be treated to the ironical smiles and mockings of (ウ) *those who remain behind you,* / What beckonings of love you receive you shall only answer with passionate kisses of parting, / You shall not allow the hold of (エ) *those who spread their reach'd hands toward you.*≫ (11)

右詩中の下線部(ウ)の「後にゐ残る人達」と下線部(エ)の「両手を拡げて引留めようとする人々」という詩句を通して、有島の確認しなければならなかった人達は、明治三十六年八月二十五日、横浜港より伊予丸に乗船して渡米の途についた時の有島の胸中に、抑えようもなく思い浮んできた人達を挙げることができよう。

「これまで私の身辺に絡まってゐた凡ての情実から離れて、本当に自分自身の考へで自分をまとめたい」（「リビングストン伝」序）という願いを抱いていた有島の胸中には、当然、有島家の家族とか内村鑑三、新渡部稲造という畏敬の師、また、初恋の女性、河野信子などの姿が鮮明に浮んでいたはずである。もっとも、有島の思想遍歴に注意してみる時、「出航」のイメージ形成に横浜の出航体験のみを重ねることはできない。フランクフォード精神病院の患者・スコット博士、社会主義者・金子喜一、弁護士・ピーボディ、そして、ワルト・ホイットマンなど多くの人達との出会いを通して自己変革を遂げた有島が、新たな決意のもとに欧州遊歴の途についた明治三十九年九月一日のニューヨーク出航も、オーバーラップさせていたと見てよかろう。

《決心の出来るやうに思ひ出して御覧なさい、そら、あの時の事を。（身をすり寄せて）……あなたの血を若くしてあげたのは誰（老船長の額に手をあてゝ）で御座います。》

《あなたの胸の奥の奥底に、私の良人の手から私を奪はうといふ執念が、陶物竈の火のやうに燃えてゐたのを私はよく知ってゐますよ。私はあなたをさうやって焼いてゐながら、仕舞にはその火の色に見とれてしまひました。》

《あなたが、見事にあの人の脳天を撃貫いて、びくともなさらずにいらっしゃるのを見ると、私は始めて男の力といふものを知りました。而してあなたと二人ぎりで、この船で、人の知らない遠い所に行かうと思ったのに、あなたは急に船を着けて、――ぢれったいたらない――私の手一つ握らずに上陸させてしまって、（略）》

老船長に出航を促すこの幻像医師の娘の甘言と媚態には、「大道の歌」のよう

な、大らかでたくましい誘引の力を認めることはできない。暴風を衝いての海図もない彼方の海への出航には、暗い宿運のかげりが漂っているのである。これは、「loafer」ホイットマンに強い共感を覚えながらも、その生に徹しきれない有島の気質的特性[注5]によるものという外はないが、次の詩中の下線部などが、「老船長の幻覚」の有島の認識志向に大きな影響を与えていたことも否定できないことである。

≪Allons! (オ) *to that which is endless, as it was beginningless,* / To undergo much, tramps of days, rests of nights, / To merge all in the travel they tend to, and the days and nights they tend to, / (略) / (カ) *To gather the minds of men out of their brains as you encounter them — to gather the love out of their hearts,* / *To take your lovers on the road with you, for all that you leave them behind you,* / To know the universe itself as a road — as many road — (キ) *as roads for traveling souls.*≫ (13)

下線部(オ)の「無始であるが如く、無終である所」への出航を促すホイットマンの誘引は、「老船長の幻覚」における「船のキールが一度も波を切らない」「彼方の海」というイメージに定着しているのであり、下線部(カ)の「お前がめぐり遇った人々の頭脳からはその思ひを――その人々の心臓からはその愛を集め」という詩句は、植村正久、内村鑑三、トルストイ、シェイクスピア、ゲエテ、ダンテ……という思想的先達への接近によって様々な変貌を遂げた認識の世界や、河野信子、リリー、ファニー、ティルダー、神尾安子……という女性との邂逅によって生命の燃焼を喚んだ情念の世界を、あるがままの自然体として有島に凝視させる力を与えたといえるのではなかろうか。とりわけ、信仰に基づく潔癖な抑制力を持ちながらも、愛の遍歴を心底で重ねていた有島にとって、下線部(カ)の「お前がめぐり遇った人々の」「心臓からはその愛を集め」「お前の愛人を路上の道伴れとし、しかもその愛人を後ろに残し」そして「旅行く魂にとっての大道」(下線部(キ))へと出航を促す詩句は、自然的情動への傾斜を支える大きな力になったものと考えられる。

妖艶な医師の娘の蠱惑性に魅かれ、彼女の良人をピストルで射殺しながらも、彼女を「手一つ握らずに上陸させてしま」い怯えていた老船長を、幻像医師の娘の蠱惑的な誘引力の支配下に、再度置いた有島は、いくつかの愛の原体験を重層的に見据えながら、心底の不可思議な自然の愛の正体を見定めようとしていたといえよう。

《医――あなた！（老船長愕然として首を抬ぐ）もうあなたと二人きりよ。老――あゝ。／室内暗くなる。／医――さあもっとよく私を御覧なさいまし。／老――見えない。／医――もっとよく。（室内益々暗く、殆んど綾目をわかず）／老――見えない。／この時突然上より垂れたる電燈の灯ともる。医師の娘の影は消えて、老船長はその写真を見つめつゝあり。》

医師の娘の誘引力を幻像の中に捉え、電燈の灯とともに医師の娘の影を消滅させた有島は、どこまでも無意識裡に動く愛の正体を見定めようとしていたのである。この無意識裡に動く愛の象徴ともいえる「幻像医師の娘」は、「彼女に祝福あれ。彼女によき夫あれ。彼女によき子女あれ。而して彼女の天使の如き純潔何時までも地の栄なれ光たれ。直かれ。優しかれ。美しかれ」（明治36・5・3、日記）という神への祈念のもとに捧げた河野信子への純愛とか、また、「彼女は実に余を不純より遠からしむる天使なり」（明治37・8・30、日記）というファニーへの純愛を原型にすることはできない。もっと肉欲的な情念に裏打ちされたものである。

幻像医師の娘の誘引の力のもとで、幻像ＡＢＣの忠告と孫娘の慕情を老船長に一蹴させた有島は、次の詩句を、胸中深くで強く噛みしめていたといえるのではなかろうか。

≪Allons! be not detain'd / Let the paper remain on the desk unwritten, and the book on the shelf unopen'd! / Let the tools remain in the workshop! let the money remain unearn'd! / (ク) *Let the school stand! wind not the cry of the teacher!* / *let the preacher preach in his pulpit! let the lawyer plead in the court, and the judge expound the law.*≫ (17)

下線部(ク)の「学校にも近づくな、教師の言葉には耳を藉すな！／僧侶には講壇

から勝手に説教をさせろ！状師には法廷で勝手に論じさせ、法官には勝手に法をひねくらせておけ！」という詩句の示す生の姿勢は、有島の日常的抑制意識の作る偽善的仮面を剥奪し、そして、心底の自然の愛の情動を見定めていくための大きな力を、有島に与えたといえるのではなかろうか。

このように、ホイットマンの「大道の歌」は、「老船長の幻覚」のモチーフ、状況設定、認識過程、中心イメージなどに強い影響を与えていると考えられるのであるが、同時に、ホイットマンとは異質の有島的特性も見落してはなるまい。ここで、暗い宿運のかげりを持った「出航」イメージと妖艶な幻像医師の娘の甘言と媚態の形象に向わざるを得なかった主要モチーフを、有島の具体的な愛の原体験の中に尋ねてみたい。

三　有島の愛の原体験

アメリカ留学時に、有島の心を強く捉えた女性として第一に挙げなければならないのは、学友アーサー・クロオウエルの妹、フランセス（愛称ファニー）である。この十三歳の少女ファニーに寄せる有島の愛は、極度に純化された聖なる愛と言ってよかろう。

《ファニーの思出は余に生命を与ふ。彼女を思ひ出づる毎に泌むが如き優しく美しき軽き悲みを心の最も清き処に感ず。彼女は実に余を不純より遠からしむる天使なり》（明治37・8・30、日記）

《余は未だ彼女の如く余に大なる impression を与へたる少女を知らず。彼女の純潔なる恨多き眼は、余が一片の回想の下に髣髴として現はれ来るなり。是れを恋とも云ひ得可きにや。されども余は恋は嫉むものなりと聞けり。余は Fanny に於て一の嫉妬を覚えず。彼女が愛せられん事は余が喜びなり。彼女が愛せん事は余が望みなり。若し彼女にして余を忘るる事なく一片の同情を余に与ふれば余は他に何の欲する所もなし。恋と云ひ得可くんば最も不思議なる恋なる可し。》（明治38・1・14、日記）

ところで、この純化された聖なる愛は、「若い情熱の仕業」によって、キリスト教への信仰に傾注していった聖なる心と同じように、意外な仮面を持つものではなかったろうか。

《総ては若い情熱の仕業だったのだ。僕は女を恋する代りに神を信じたのだ。若い、華やいだ、平和に育った心が、何うして生に対する不安を信仰となるまでに感じ得よう。心の底には負けじ魂を有り余る程持ちながら、而して熱し易い南国の血液を十分禀けながら、女のやうに内気で物にこだはる僕は、何事につけても心のままに振舞ふ放胆さがなくって、動ともすれば、独りで何事も胸の中に収めて物を思ふやうな青年だった。その結果僕の情熱は内面的な信仰の方へと牽かれて行った。僕は恋人の胸に流す涙を、寝前の祈禱に流してゐた。（略）僕は痩せるまでに身を詰めて日夜神の中に住み切らうとした。然し僕にはそれが出来なかった。色々な誘惑が叢雲のやうに絶えず心の中に湧き起って来て、神と僕との間に真黒な壁を築かうとした。その誘惑の中でも殊に重い恐ろしい誘惑は肉情のそれだった。》（首途、傍点引用者）

「若い、華やいだ、平和に育った心」を己れの内に自覚することの出来た有島には、自己防禦のための猜疑心を周囲に向けなければならない負い目などはなかったはずである。富裕な経済的基盤と強大な社会的権勢と温雅な性格容姿に恵まれた有島が、「何事につけても心のままに振舞ふ放胆さ」を示し得なかったのは、有島自身の語るように、「内気で物にこだはる」性格のためといえるのであるが、これは、怜悧な理知と鋭敏な感性と柔和な雅量と誠実な実践志向を合わせ持つ有島の、宿命的悲劇と言い換えることもできよう。ファニーに愛を寄せる有島は、この宿命的悲劇を背負いながら、「痩せるまでに身を詰めて日夜」聖なる愛の中に「住み切らうとし」ていたといえるのではなかろうか。

次いで、注目しなければならないのが、リリーへの愛である。

《Lily を思ふ情は今も聊かも減ずる事なし。されども同時に余は彼女を厭ふ。余は何故なるかを知らず。》（明治37・8・30、日記、傍点引用者）

これは、リリーに対する思いが、「不純より遠からしむる天使」のようなファニーとの比較のもとに記された日記であるが、有島の、リリーを「厭ふ」気持の底部に隠されているものは、他日の日記の中に、明確に尋ねあてることができるのである。

《余が Ward にありて最も余を厭ひ、余の最も近づき難しとするものは彼（引用者注、「ノリス」）なり。年三十一二なる可し。日常の応接に巧なる市井の

少年と異る事なく所謂社交を好む。余は彼がLilyに近づく毎に殆ど堪へ得ざる苦痛を感ず。宛ら桜の若樹に毛虫の集りしが如し。》（明治37・7・29、日記、傍点引用者）

ノリスがリリーに「近づく毎に」感じる「堪へ得ざる苦痛」は、ファニーとの交際においては経験することのなかった苦痛であるが、これは次の軽侮や悲哀と同質の情動と見てよかろう。

《此夜患者と共に階下のmeeting roomに到る。此に男女の患者相集りてさゝやかなる社交的の快楽をなすなり。（略）余が房の患者三人、女患者一人、而して余に戦慄を齎らしてLilyも来りぬ。不快極る事のみ多き中にも、Lilyがかゝる中に立ち交りて共に叫び共に笑ふを見て、余の心の中には一種の軽侮と悲哀と来りぬ。理想を夢みて現実に求めんとする愚かなる者よ。美しと見つる者に近づけば汚れあり。清しと思へるものに触るれば塵集れり。》（明治37・8・1、日記、傍点引用者）

「日常の応接に巧なる」社交家ノリスがリリーに接近するごとに「堪へ得ざる苦痛」を感じなければならなかった有島の気持は、リリーの倫理的堕落を懸念する潔癖な心痛というよりも、抑え難い嫉妬を底部に持つ不安であったといえよう。これは、次の日記内容と照応させることによって、より明瞭になってくるのである。

《此夕Lily余にうれしき笑を与へぬ。彼女の笑ひは余の涙を誘ふ。されども彼女は厭はしき所あり。余は彼女が今にして女のvanityより救はれん事を祈る。》（明治37・9・8、日記、傍点引用者）

つまり、ファニーの持ち合わせないリリーの「vanity」とその蠱惑性によって、有島は、不安と嫉妬と嫌悪と充足の入り混じる「堪へ得ざる苦痛」を背負わねばならなかったのである。

「社交的の快楽をなす」「meeting room」の患者達の中に立ち交り、「共に叫び共に笑ふ」リリーの姿を見て、「一種の軽侮と悲哀」とを抱く有島は、リリーの叫びと笑いの中で、「女のvanity」とその蠱惑性を感知しながら、やはり、同様の不安と嫉妬と嫌悪の念に陥っていたといえるのである。そして、このリリーの不可思議な魅惑の謎と向い合う有島は、「不思議に男の羨望と嫉妬とを挑発することに妙を得」「欠点なり不貞操が、そのまゝ」「誘惑」（石にひしがれた雑草）となる娼婦型（注6）M子の魅惑の原型を見定めていたといえるのではなかろうか。

「首途」の有島は、「ふとリリイとすれちがった」時の様子を「氷のやうに悒欝に寒く閉ぢてゐた僕の心は、その瞬間に暖かく嬉しく跳り上った。然し僕はあの何事も知らぬ純潔なリリイに対してすら、唯清い嘆美の情を向けてゐると自分を欺きながら……腐り切ったセンチメンタリズムよ。僕の心はすぐ又氷よりも冷たく堅く閉ぢてしまった。」（傍点引用者）と描きながら、心底に動くリリーへの抑え難い肉情を確認しているが、不安と嫉妬と嫌悪と肉情をそそるリリーの不可思議な魅惑の謎は、「不純より遠からしむる天使」のようなファニーの純潔と同様に、有島の愛の原体験において、重要な意味を持つものであったといえるのである。

このように、アメリカ留学時における有島は、聖女的純潔さを備えたファニーと娼婦的魅力を潜めるリリーという対照的な二人の女性との出会いを通し、確な重みを持つ命の昂揚を体験することができたのである。安川定男氏は、有島の、リリーに対する愛について、「それはファニーに対する感情ほどに深いものではなかった」（注7）と論じておられるが、二つの愛は、けっして深浅を問うことのできない異質の愛であったといわなければなるまい。

この二つの愛は、「僕は聖者になるには余りに人間の欲情を持ち過ぎるし、凡人になるには余りに潔癖過ぎる。僕の生命は原始的な純一さを持たずに、文明の病毒を受けて何時でも二元に分解されてゐる。」（首途）という自己認識を、単なる観念としてではなく、日常次元の具体的な諸要素を抱え込む重い生命体として、有島の魂に深く刻み込んだといえるのではなかろうか。

注目しなければならない第三の愛は、有島がこの二つの愛のさなかにおいて確認しなければならなかった河野信子への愛である。この愛は、有島の自己認識に暗い影を落したものと考えられる。

《今日偶彼女と遇ひて、余の心の中には嘗て彼女に対して経験せざりし恐しき、されども甘き感情満ちぬ。（略）余は今に至る迄彼女を愛しき。されども今日は単に彼女を愛すてふ夫れにては余の心は不満を感ずるなり。さらば余は彼女を恋せるなるか。》（明治36・5・3、日記、傍点引用者）

この日記には、信子への愛を自覚しながらその愛に戦く無垢な青年有島の、純粋な心の痛みが覗いているのであるが、次のような日記内容に着目する時、有島の信子に寄せる愛が、受動的で、しかも、同情的性格[注8]を持つものであったことが判明してくるのである。

《今日亦新渡戸氏宅に彼女に遇ひぬ。余の心は高潮寄せたる如くむらがり騒ぎぬ。云ふ可からざる歓喜心の底より湧き、彼女の面を打ちまもれば知らずして笑ひ頬に浮ぶ。彼女は痛く痩せぬ。（略）余は彼女が永く余を熱愛せしを知る。余の彼女に対する愛は受動的のみ。可憐なる小さき彼女の心臓日々夜々何物によりて躍れるかを思へば、彼女の夜々の笑ひと涙と何者に向って瀉がるゝかを思へば、余は真に彼の唇に余の唇を燃さんと希ふ。」（明治36・5・22、日記、傍点引用者）

この信子に対する有島の受動的、同情的愛は、アメリカ留学時の有島が、信子よりの書簡を受け取った時に記した日記の中にも伺うことができる。

《信子の書信委細に彼女と其母の近状を報じ来る。忘るゝとにはあらざるも事に紛れて思ひ出でざりし彼女の回想瀚然として頭を襲ひ、過ぎし月日に起りし事繰返し思ふ。或時はほとほと彼女を恋はんとまでせし事ありき。されども彼女も亦余が愛する妹のみ。」（明治37・8・10、日記、傍点引用者）

《彼女は苦しみの中に育てられて幾多の欠点なきにあらず。されどもそは愈々余の愛心を激しからしむるのみ。》（同）

「事に紛れて」信子のことを「思ひ出でざりし」状態となっていた有島にとって、信子は、離れ難き恋人としての存在性を失っていたものと考えられるが、信子に対する同情的愛を確認する有島は、リリーとかファニーへの愛を思い浮べながら、次々と胎生してくる不可思議な愛の正体の解明に向わなければならなかったといえるのではなかろうか。有島にとって、この愛の正体の解明は、自己検証にも繋っていくものである。

帰国後、見知らぬ女性との結婚を父に勧められた有島は、「見も知らぬ女と結婚するよりは、気心の知れた河野信子と結婚したい」[注9]という願いを父に示し、そして、結局は、父の強硬な反対を受けて諦めざるを得なかったといわれているが、こうした経緯のもとに起伏する信子への愛は、聡明、誠実な有島にとっては、唾棄すべきものであったといえるのであり、信子の結婚を機に、認識者有島の鋭利な自己検証が厳しく始るのである。

《何故に我が神経は然かく刺激せられて、味へども其の味を知らず、眠れども夢安からざるか。余は初めそを信子の他に嫁がんとするを予想せる事、竝に信子が嫁ぎたるの報に一層強く驚かされし事に帰せんとせり。されども怪しむ可し、今は余は殆んど彼女の事を思ひ居らず。余が心にも云ふ可からざる苦痛を覚えしむるものは、余が傾けたる強烈なる感情は、脆く軟きものに衝りて憐れにも砕け散り去りたるを、冷笑し且つ憤恚するの苦痛なり。余は其の中心に於いて一のcowardに過ぎたるにあらずやとの危惧は、余をして失望と苦痛との淵に沈ましむ。余若し一個のcowardに過ぎざるならば、余が生存の意義は何処にありや。》（明治41・4・18、日記、傍点引用者）

これは、信子の結婚式の報を受けて後、憂欝と不眠に悩まされていた有島が、その苦悩の中で内省的に記した日記であるが、問題の第一は、瀬沼茂樹氏がすでに着目されているように、「札幌における憂欝症の原因は信子との問題にあるとみていたのに、実は信子を愛していたという感情に欺かれて、自己本然の要求に生きることを怠っていた」[注10]「自己欺瞞」である。つまり、信子に対する受動的、同情的愛によって隠されている自己本然の愛の衝迫に正直に生きようとしなかった自己欺瞞の告発である。

問題の第二は、家父長的「父」への告発が後退し、「coward」意識のもとに起される自己告発と自己検証への志向である。「余若し一個のcowardに過ぎざるならば、余が生存の意義は何処にありや」という自己不安は、「僕は自己の分解を徹底させる。掘り下げて掘り下げて遂に個性を見失ふか、又はそこに不壊の金剛土を見出すか。二つに一つだ。それが僕の一生の仕業であらねばならぬ。僕は何時か必ず自分を実証する。僕の存在を存在として味識する。そこに行き着くまで僕は決して休むまい、どんな成功にも蹉跌にも。」（首途、傍点引用者）という志向を生み、やがて、「霊とか肉とか云ふ区別はない。その代りに私と云ふものがある」（「リビングストン」の序）という認識に到達するのである。妻安子との愛の危機は、この苦渋に満ちた自己検証の戦いの生み出す不可避的状況であったといえよう。ここで、最後に、妻安子との愛の危機に着目してみたい。

婚約の期間、肉欲の要求が影を潜め、「子供のやうな清い心」（同）であった有島を襲う愛の危機が、具体的にどのようなものであったか、速断はしがたいが、その大体の輪郭は、日記の中に捉えることができるのである。

《彼女は、人を説服し得る様な人格で以つて、男を励まして仕事をさせる女ではなく、その優しさと服従とによって、夫に事を為さしむる女である。女は女らしくしてゐるがいゝ。余は女の励ましを必要とする程弱くない。》（明治41・8・12、日記、傍点引用者）

これは、婚約期の日記であるが、この時期の有島にとって、「優しさと服従とによって夫に事を為さしむる」安子の愛らしい特性は、心を満す魅力的な対象であったのである。札幌と東京との二つの土地に別れて過す婚約期の有島と安子とは、毎日のように書簡を交わすのであるが、有島は、こうした生活の中で、ファニーやティルダに見せたような宗教的感情にも通じる聖なる愛を育てていたのである。

しかし、この純化された聖なる愛は、やがて、「一陣の風に吹きまくられる塵の様に、不意の衝動によってあちこちに吹きまくられ」（明治41・10・3、日記）思いも掛けない危機が訪れるのである。

《時々、お前の浅慮故に、私を牽きつけなくなる程、私は冷かに懐疑的になる事がある。恐らくお前は、余りに子供過ぎ、余りに単純なので、私の真摯に男らしく捧げる、烈しい恋を理解出来ないであらう。恐らく、私は余りにも強い思ひを抱いてゐるので、何人も私の熱情にふさはしく報いることが出来ないであらう。》（明治41・9・30、日記、傍点引用者）

この日記を書き記す時点の有島にとって、「優しさと服従」に生きる安子の愛らしさは、すでに、熱情に報いる魅力とはなり得なかったのである。「烈しい恋」とか「強い思ひ」とか「熱情」という言葉によって表わされる有島の内的衝迫は、「女の励ましを必要とする程弱くない」という意識的な思いとは裏腹に、積極的な「烈しい」「強い」「熱情」を求めていたといえるのではなかろうか。しかも、この熱情は、「虚栄心と依頼心の結晶の様」（明治42・1・31、日記）なものであってはならず、また、「蔦が木の幹にすがる様に、人生に縋りつく」（同）ような力であってはならなかったのである。つまり安子自身の確固とした強烈な内的衝迫の上に、「女性の本質的な美と献身」（同）を発揮し、有島の「心の奥底」に重い充足感を与えるものでなければならなかったのである。安子への憧憬的な熱情から平静な心を取りもどした有島にとって、「自分の意見と云ふものを全然持ってゐない」「それ程子供っぽく従順な」（明治42・2・7、日記）安子は、「依頼心の結晶の様」なものでしかなかったといえるのである。

《俺の血管の中にはお前が想像も出来ない程毒血が流れているんだ。結婚してからもいくたりの女に誘惑を感じたか知れなかった。ある時は運命がお前以外の女に俺を結び付けてるなと思った事さへあった。》（死と其の前後、第三場）

心底に抬頭する自己本然の愛の衝迫に正直に生きようとした有島は、安子にも同様の正直な愛の激しさを求めたのであり、それが満されない時の有島の心には、「不意の衝動」が「一陣の風」のように起り、そして、果てしない愛の遍歴へと有島を駆り立てていったといえよう。「天下晴れての肉の楽しみを漁る」「結婚は総てを見事に破壊し」「愈々自分を明らかにすべき時が来た」（「リビングストン伝」の序）という思いを持つ有島が、突然、「霊の誕生地なる独立教会」（同）に退会届を出すに至るのは、必然の帰結であったのである。

「船のキールが一度も波を切らない彼方の海」は、退会していく有島の前途の象徴であり、また、「幻像医師の娘」は、有島の心底に抬頭する自己本然の愛の衝迫を満す女の魅惑の象徴に外ならない。

むすび

情念をくすぐる妖艶な幻像医師の娘と死の危険を喚び起す幻像ＡＢＣと温かな骨肉の愛を揺さぶる孫娘と、そして、冷静な日常的判断を覚まさせる水夫長との四つの力の角逐は、正気と幻覚との交錯する中で、分裂的危機感を次第に深めていくのであるが、この角逐葛藤を重ねる劇緊張には、怜悧な理知と鋭敏な感性と柔和な性格と誠実な実践志向を兼ね備えた有島の、苦渋に満ちた精神の格闘が色濃く投影しているといえよう。

「ＳＰＨＩＮＸ（ａ ｆａｒｃｅ）」の青年ＡＢＣは、「老船長の幻覚」の幻像ＡＢＣの設定と同様に、作者の多様な認識志向を視角化したものであるが、芥川は、この三様の認識葛藤を、主人公「王」の認識視座において深めているとは言い難い

のである。王宮的世界の華麗と欺瞞を否定し、牧歌的世界の純朴無垢な魂を備えた「少女」への愛に「王」を誘いながらも、結局は、成就し難い悲運の枠組みの中で、感傷的にしか成立しない夢想の愛に「王」を浸らせ、そして、多様な認識志向を娼婦の生によって性急に相対化していくのであるが、こうした経緯を辿る芥川の精神は、感傷的浪漫主義に染っていたという外はない。これに対し、「老船長の幻覚」の有島には、理知と情念に支配された生の混沌性を重層的に見通す冷徹なリアリズムの眼が厳しく冴えていたといえるのである。

本多秋五氏は、有島の特性の一つに「理解力過剰のための思念錯綜」[注(11)]を見ておられるが、これは、「老船長の幻覚」における有島の、生の混沌を重層的に見通す冷徹なリアリズムの眼を支える重要な力になっているものであり、また、自由な魂を永遠の旅程に生々と駆り立てるホイットマンの健康な明るさを曇らせる力でもあったのである。

聡明、誠実、温雅な美質の生む有島の過剰な理解力は、有島に絶対観念への信奉を許そうとはせず、そして、芥川には見られない堅牢な生活基盤がそれを援け有島に果てしない反指定の旅を強いていたといえよう。

《人は相対界に彷徨する動物である。絶対の境界は失はれた楽園である。／人が一事を思ふ其の瞬間にアンチセシスが起る。／それでどうして二つの道を一条に歩んで行く事が出来ようぞ。／或る者は中庸と云ふ事を云った。多くの人はこれを以て二つの道を一つの道に為し得た努力だと思って居る。御目出度い事であるが、誠はさうではない。中庸と云ふものは二つの道以下のものであるかも知れないが、少くとも二つの道以上のものではない。詭弁である、虚偽である、夢想である。世を済ふ術数である。／人を救ふ道ではない。》（二つの道、明治43・5）

愛や思想の遍歴を重ねながら、常に、それらを相対化し、そして、「不壊の金剛土を見出す」（首途）までの際限のない検証を企図する有島の生は、まさに、「海図のない」彼方の海へ向って出航する老船長の旅そのものと言ってよいのである。

《芸術とは遊戯ではない、享楽でもない。理想の体現でもない。人が自己の経験した所を自己の感情に於てまざまざと経験し返し得た時、其の感じを種々の方法で他人に伝へて、同じ感じを味はせるのを言ふのだ。》（「お目出たき人」を読みて）

「海図のない」大海のさなかにおいて、「自己の経験した所を自己の感情に於てまざまざと経験し返」そうとする有島にとっては、理想とか主義[注(12)]も、尊厳な自己の生命体を形骸化していく危険な陥穽でしかないのである。このようにして、自己の実存に徹しようとする有島の厳しい精神が、バーナード・ショウの、奇矯深刻なる諷刺家というイプセン観を否定したのは当然の帰結である。有島は、この時、すでに、イプセンの悲劇の中に、己れの悲劇的結末を凝視していたのではなかろうか。

〈注〉

(1) 井上良雄〈芥川龍之介と志賀直哉〉（文芸読本、一九七七、河出書房新社、七〇頁所収）
(2) 菊地寛〈芥川の事ども〉（文芸読本、一九七七、河出書房新社、五一頁所収）
(3) 西垣勤〈有島武郎論〉（一九七一、有精堂、一九頁）
(4) 拙稿〈「青年と死」論覚え書――二つの愛とアルチバシェフ「死」の影響――〉（岡大国文論稿、一九八一、三、五九頁）
(5) 小坂晋氏は「麟型の躁麟質」と規定されている。（〈有島武郎の性格――精神病理学的考察――〉国語と国文学、一九六二、二、六四頁）
(6) 小坂晋〈「石にひしがれた雑草」と「或る女」――主人公の精神構造と主題――〉（日本近代文学 第四集、一九六六、五、一三八頁）。なお、この娼婦型の女が「老船長の幻覚」における「幻像医師の娘」として形象化され、そして、「或る女」の葉子、「大洪水の前」のナアマ、「カインの末裔」の佐藤与一の妻などに繋っていることは留意しなければならない。この関連については、すでに、増子正一氏が〈「老船長の幻覚」試論〉（「志賀直哉、有島武郎の文学」解釈学会編、一九七三、九四頁）において着目されている。
(7) 安川定男〈有島武郎論〉（一九七一、明治書院、七二頁）
(8) ティルダ宛の書簡（一九〇八、二、二六付）で、有島自身、「同情的愛」として説明している。